

惟明親王の先行歌摂取の方法

—『千五百番歌合』の歌を中心として—

北原 沙友里

はじめに

『千五百番歌合』（一二〇一～一二〇三年頃）は、後鳥羽院が正治百首の初度、後度が続いて下命した第三度百首を歌合に結番したもので、三〇名の歌人が百首歌を各詠進した。構成は、春二〇首・夏一五首・秋二〇首・冬一五首・祝五首・恋一五首・雑一〇首で、それぞれ春（一～四）・夏（一～三）・秋（一～四）・冬（一～三）・祝（一～三）・雑（一・二）に分け、各七五番を単位として二〇卷一五〇〇番に結番し、歌合史上最大規模のものとなっている。

詠者の一人である惟明親王（一一七九～一二二二）は、高倉天皇の三宮であり、後鳥羽院の異母兄に当たる。『正治初度百首』（一二〇〇年）に続いて二度目の公的な百首歌への参加であった。しかしながら、惟明親王の『千五百番歌合』の百首歌を取り上げ具体的に論じたものは、管見の限り見当たらない。

そもそも、惟明親王を取り上げた研究が少なく、主なものは山崎桂子氏^{〔1〕}と田仲洋己氏^{〔2〕}によるもののみである。山崎氏は、その初期の伝や伯母である式子内親王との関わりを考証されている他、勅撰集

等に見える逸文歌や『正治初度百首』への詠進の背景や鳥題の歌についても論述されている。田仲氏は惟明親王の『正治初度百首』詠について、表現や詞選びなどから見えてくる同時代歌人からの影響についても言及されている。近年では明治書院の和歌文学大系の一冊として『正治初度百首』の注釈書が出版され（二〇一六年）、惟明親王の『正治初度百首』歌についても全歌に訳注が付されたのが画期的なことだといえる。このように惟明親王を取り上げた研究は現在に至るまで数少なく、その中でももっぱら『正治初度百首』の百首歌が取り上げられ論じられる傾向にあった。

そのような中で、唯一惟明親王の『千五百番歌合』詠について考察しているものが、田仲氏^{〔3〕}の論考『古来風体抄』の成立をめぐって「の末尾に付された「惟明親王詠の主要先行典拠表現需要一覧」で、これは『正治初度百首』・『千五百番歌合』の両百首から「惟明詠の本歌もしくは惟明がその発想や表現を受容したと考えられる先行歌」を指摘している。二つの百首歌から計五四首を取り上げており、惟明親王が先行歌の取り入れに積極的だったことが推察され、親王がどのような先行歌を摂取して詠作していたのかを明らかにすることは、彼の和

歌を論じる上で欠かせないことだといえるだろう。

田仲氏の一覧に従えば『千五百番歌合』詠については、三五首の指摘がある。とはいえ、田仲氏は歌の指摘だけに留まっており、かつ典拠作品の指摘が「便宜上、主に先行勅撰集・万葉集所収歌に限って掲出」とするなど、不十分な印象も拭えず、その方法を明らかにするためには、より詳細な考察が必要だと思われる。

そこで本稿では、田仲氏の指摘する『千五百番歌合』詠三五首を対象とし、親王が『千五百番歌合』でどのように先行歌を撰取していたのかを探り、惟明親王の先行歌撰取の方法を明らかにするための足かりとしたい。

具体的な考察に入る前に、まず三五首全体を簡単に概観しておく。まず、部立別の内訳をまとめたものが表①である。どの部立もおおよそ二〜四割程度の歌が指摘されており、数の上からは部立による偏りは見出せない。唯一祝部が全五首のうち三首と多いような印象も受けるが、これには後述する通り、先行歌を受容した歌だと判断しがたいものが複数あり、検討が必要なものだといえる。

【表①】

春	8
夏	3
秋	8
冬	5
祝	3
恋	6
雑	2

次に典拠作品別にまとめたものが表②である。一見してわかるように、『古今和歌集』が際立って多く、次いで『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』と続く。

田仲氏⁽⁴⁾は「三宮惟明親王歌の正治初度百首詠について」で、

【表②】

万葉集	2
古今集	18
後撰集	3
拾遺集	5
後拾遺集	4
詞花集	3
金葉集	4
千載集	1
日本書紀	1
源氏物語	1

えば、物語取りの歌は少ないようである。しかし、「同時代・近時代の歌人たちの表現を取り入れる」という点は、『金葉和歌集』や『千載和歌集』を典拠とする歌も詠んでいることから、『千五百番歌合』にも当てはまるのではないと思われる。この「同時代・近時代の歌人たちの表現を取り入れる」という特徴が重要ではないかと考える。

渡邊裕美子氏⁽⁵⁾は俊成卿女の「千五百番歌合」を取り上げ、同時代歌人からどのような影響を受けているのかを考察し、「1. 発想、2. 詞・詞続き、3. 表現方法の三つのグループに分け」て検討されている。そして「俊成卿女は詞や発想のレベルにとどまらず、擬人法や古典撰取といった表現方法に至るまで、多く同時代歌人の先行歌から学んで取り入れている」ことを指摘されている。また、「これは俊成卿女が初めて晴の場で発表した百首歌であって、当時の代表的歌人を網羅するこの歌合において、俊成卿女はそれ以前に公認されていない数少ない「新人」のひとり」でもあったと森本元子氏の論⁽⁶⁾俊成卿女の研究⁽⁷⁾桜楓社、一九七六年）を引きながら述べる。

惟明親王も正治・建仁頃はまだ二十歳前後の青年で、正治二年の初

惟明親王の『正治初度百首』詠について大きく四つの傾向を指摘している。その内の一つが「漢籍や王朝物語世界への志向」であったが、『千五百番歌合』の三五首に限って言

度百首がはじめての公の場への出詠だった。同時期に催された『千五百番歌合』でも新人のひとりであったことは疑いない。俊成に養育され歌壇で活躍した俊成卿女と、あくまで親王であり、これ以降公の場で歌を詠まなくなったと見られる惟明親王とは、境遇が全く異なるが、『千五百番歌合』に新人歌人として参加したことは共通しており、その詠作方法にも似たような傾向を見出せる可能性は高いのではないだろうか。つまり、惟明親王は『千五百番歌合』詠作の際にも同時代歌人の先行歌を通して、古歌を撰取し詠作を行っていたのではないかということだ。本稿では、この観点から田仲氏が指摘する三五首について、改めて検討していく。なお、次頁に田仲氏の指摘する惟明親王の歌三五首を一覧にして掲げた⁶。頭に振った通番は便宜上私に振ったものである。

一 古歌を直接撰取している例

まず、直接古歌を撰取していると見なせる一四首を取り上げる。以下、先に惟明歌をその次に一字下げで指摘されている典拠歌を載せる。
3 つのくにのなにはのはるを見わたせば⁷ かすみをよする おきつし

ら浪 (7)

(春・五十八番・一一六)

正月ばかりにつのくににはべりけるころ人のもとにいひつかはしける

こころあらむ人にみせばやつのくにのなにはわたりのはるの

けしきを

(後拾遺集卷第一・春上・四三・能因法師)

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふる おきつ白浪

(古今集卷第七・賀歌・三六〇)

9 うの花のかきねつづきの ほととぎす月かげわくる夜半のしのび
ね

(夏・三五三番・七〇五)

す 卯花のさけるかきねの月きよみいねずきけとやなく ほととぎ

(後撰集卷第四・一四八・よみ人しらず)

10 まつかげのいは井の水のゆふぐれをたづねぬ人や秋をまつらん

(夏・四八〇番・九五九)

河原院のいづみのもとにすずみ侍りて

松影のいはるの水を むすび あげて夏なきとしと思ひけるかな

(拾遺集卷第二・夏・一三二・惠慶法師)

11 けふのみと夏をながむるあさぢはらすこす風のかたへすずし
き

(夏・五二二番・一〇四三)

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふそののかよひぢはかたへすずし風やふく

らむ

(古今集卷第三・夏歌・一六八・みつね)

35 ふりにけるみわのひばらにこととはんいくよの人かかざしをり
けん

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通 番 部 立
秋								夏			春								
817	775	676	620	606	578	550	536	522	480	353	283	255	226	184	170	58	30	1	番
うちわびて ながむるそらの うき雲に こよひばかりの 秋風ぞふく	ゆきかよふ 人だにあらば とひてまし 山ちのきくの ちよの気色を	はつかりは こしちの雪を わけすぎて みやこの霧に いまぞなくなる	ゆく人も とまらぬ野辺の 花すすき まねきかねてや つゆこぼるらん	ちりぬれば かげもとまらず なりにけり 野ざはの水の はぎが花ずり	七夕の あかぬわかれの なみだゆゑ もみちのはしや 色まさるらん	あきたちて いくかもあらぬに あはれさを いつならひけん ゆふぐれの空	きのふより をぎのした葉に かよひきて けさあらはるる 秋のはつかぜ	けふのみと 夏をながむる あさはらはら すゑこす風の かたへすずしき	まつかげの いは井の水の ゆふぐれを たづねぬ人や 秋をまつらん	うの花の かきねつづきの ほととぎす 月かげわくる 夜半のしのびね	水むすぶ きしのやまぶき さきしより そこさへにほふ あでの玉河	さく花に こころをとめて かりがねの かへりわづらふ あけぼののこゑ	かくしつづ いまひとしほや まさるらむ はるさめそそく 浦の浜松	よし野山 みねのさくらの さきしより はなによがれぬ たびねをぞする	たづねつる 花にかはらぬ いろながら をられぬものは みねのしら雲	つのくにの なにはのはるを 見たせば かすみをよする おきつしら浪	けふもなほ ゆきふるまつに おとづれて こゑうちそふる はるのはつかぜ	いつしかと 雲井にはるや たちぬらん ゆきげをこめて かすむ空かな	和歌
			35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	通 番 部 立
			雑		恋						祝			冬					番
			1422	1394	1337	1267	1225	1197	1183	1155	1112	1070	1056	1042	1028	1000	901	887	番
			ふりにける みわのひばらに こととはん いくよの人か かざしをりけん	なみのおと 風のひびきも なれながら いくよになりぬ まつがうらしま	いまこんの ちぎりはたえて なかなか たのめぬ月ぞ よがれがちなる	こころこそ ひとかたならず まよひぬれ つりするあまの うけならねども	ものおもふ こころのうちに やどりきぬ ふじのたかねも むろのやしまも	たのまじと おもふものから くれごとに こころにかかる くものふるまひ	いまこんと ちぎりしほども としふりて のきはしのぶに 庭はあさちに	かくなんと いかでか人に もらすべき おもひしのぶの 山のした水	くもりなき あまてる神の みづがきに 君がちとせの かげうつるなり	いくたびか 君が御代には めぐりあはん 月日の光 ちちの春秋	さざれ石の いはほとならん ゆくすゑを ちたび見るべき 君とこそきけ	けふまでは まだゆきふかき みよし野の 山のあなたに 春やきぬらん	はるちかき こほりのしたの さざなみは うちいでんことや 思ひたつらん	あらしふく やそうち川の なみのうへに この葉いざよふ せぜのあじろぎ	とふ人の ふみわけてける にはのゆきの あとをぞうつむ よはの月かけ	まれにこし 都の人はかれはてて くさのとざしに あられふるなり	和歌

詠葉

(雑・一四二二番・二八四五)

いにしへに有りけむ人もわがごとやみわのひばらにかざし折りけん

(拾遺集卷第八・雑上・四九一・人まろ／万葉集卷七)

右に挙げた五首はいずれも元歌と似通った詞続きや情景の歌となっている。3の上句は後拾遺集歌の下句と類似したものになっており、9でも、後撰集歌は卯の花が咲く垣根を月が照らす情景と、そこに鳴く時鳥が詠まれ、惟明歌でも「うの花のかきねつづき」「時鳥」「月かげ」「しのびね」と似たような詞が並び、似たような情景が詠まれる。10では上句がほぼ一致し、11は、晩夏の歌であること、下句が「かたへずしき風」「風のかたへずしき」と似通っていることが指摘できる。35の歌も拾遺集歌と表現がほぼ一致している。

18 ゆきかよふ人だにあらばとひてまし 山ぢのきくのちよの気色を

(秋・七七五番・一五四九)

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

ぬれてほす 山ぢの菊のつゆのまにいつかちとせを我はへにけむ

(古今集卷第五・秋歌下・二七三・素性法師)

31 ものおもふこころのうちにやどりきぬ ふじのたかねも むろのや

しまも

(恋・一二二五番・二四四九)

題不知

いかでかはおもひありともしらすべき むろのやし まのけぶり

ならでは

(詞花集卷第七・恋上・一八八・藤原実方朝臣)

題不知

むねは ふじ そではきよみがせきなれやけぶりもなみもたたぬ
ひぞなき

(詞花集卷第七・恋上・二二三・平祐季)

32 こころこそひとかたならすまよひぬれつりするあまのうけなら
ねども

(恋・一二六七番・二五三三)

伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

(古今集卷第十一・恋歌一・五〇九・読人しらす)

右の三首はいずれも判詞に指摘がある。18は「山ぢのきくゆきかよふ人なきよしは仙家の心にや侍らん、」ともあるように、古今集歌を踏まえて「ちよの気色を」と詠む。31では、詞花集歌が二首指摘されているが、これらの歌を直接撰取したというよりは、恋歌の中で多く詠まれてきた恋に焦がれる象徴としての富士、室の八島を踏まえて詠んだと考えるのが妥当だと思われる。判詞には「右歌は、思ひにかかる心に、ふじのね、むろのやしまをとにもやどされたる、めづらしく、たくましき風情なり、うたがひなき勝に定められ侍るべし」とある。判詞通り「ふじのね、むろのやしま」を共に詠んでいる例は他になく、その組み合わせの斬新さが「たくましき風情なり」と称され「うたがひなき勝に定められ侍るべし」と評価されたようである。32は、判詞に「右歌は、いせのうみにつりするあまのうけなれやこころひとつを

さだめかねつる、と侍る歌にあまりにたがはずや侍らん、もとすゑの詞のとりちがへられて侍るばかりにこそ（後略）と指摘されているように、古今集歌の上句と下句をほぼ入れ替えただけの稚拙なものだといえる。

このように、古歌を直接撰取しているものは表現や詞続き、構造がほぼ似通っている、いつてしまえば平凡な歌も多々見受けられる。田仲氏は惟明親王の『正治初度百首』詠の特徴の一つに先行歌の発想や詞続きを無造作に取り込んだと思われる歌が散見されることを指摘されていたが、『千五百番歌合』でも同じような傾向にあるといえるだろう。とはいえ、単純に古歌の表現を取り入れた歌ばかりではなく、富士と室の八島を一首の内に詠み込んだ31のように、工夫の跡が窺える例もある。

4 たづねつる花にかはらぬいろながらをられぬものはみねのしら雲
(春・一七〇番・三四〇)

水のほとりに梅花さけりけるをよめる
春ごとに^ながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

(古今集巻第一・春上・四三・伊勢)
22 あらしふくやそうぢ川のなみのうへにこの葉いさよふせぜのあじろぎ
(冬・一〇〇〇番・一九九九)

柿本朝臣人麿從近江国上来時至宇治河辺作歌一首
もののふのやそうぢかはのあじろきにいさよふなみのゆくへ
しらずも

(万葉集巻第三・雑歌・二六四)

17 はつかりはこしぢの雪をわけすぎてみやこの霧にいまぞなくなる

(秋・六七六番・一三五)

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに
(古今集巻第四・秋歌上・二一〇・よみ人しらず)

21 とふ人のふみわけてけるにはのゆきのあとをぞうづむよはの月かげ

(冬・九〇一番・一八〇)

わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなれば

(古今集巻第六・冬歌・三二二・読人しらず)

23 はるちかきこほりのしたのさざなみはうちいでんことや思ひたつらん

(冬・一〇二八番・二〇五五)

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた

谷風にとくるこほりのひまごにうちいづる浪や春のはつ花

(古今集巻第一・春歌上・一二・源まさずみ)

4 の典拠元の古今集歌では「をられぬ水」が水面に映った花を指しているのに対し、惟明歌では「をられぬもの」と詞を少し変え、さらに指しているのも花と同じ色の白雲になっている。同様の例が22で、元の万葉集歌とほぼ同じような詞続きになっているが、万葉集歌では「いさよふなみ」と波がたゆたっている様子を詠んでいるのに対し、惟明歌では「この葉いさよふ」と川の上に散った木の葉がたゆたって

いる情景に詠み替えられている。17は、典拠元の古今集歌では春霞（帰雁）と秋霧（初雁）の対比が詠まれているのに対して、惟明歌では初雁を歌い、越路の雪と都の霧を対比させている。この「みやこの霧」はこれ以前に例を見ない表現であり、惟明親王独自の表現だといえる⁸⁾。

次の21では、元の古今集歌が「ふみわけてとふ人しなれば」とそもそも訪れる人がいなくて「みちもな」かつた情景が、惟明歌では「とふ人のふみわけてける」と過去表現を用い、「ゆきのあとをぞうづむ」と、訪う人の存在を感じさせる情景へと詠み替えられている。23では元の古今集歌が春の歌として雪解けを詠んだ叙景歌であるのに対し、惟明歌は冬歌として歳暮を詠み、氷の下を波を擬人化して詠んでいる。以上の五首のように、典拠とした歌の表現や情景、主題を変えるなど趣向を凝らした歌も複数見出せる。

また、次の一首は、田仲氏の指摘する歌だけではなく、別の古歌も参考にして詠作していると考えられる。

6 かくしつづいまひとしほやまさるらむはるさめそく浦の浜松
(春・二二六番・四五二)

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

(古今集巻第一・春歌上・二四・源むねゆきの朝臣)

傍線を引いた箇所が古今集宗于歌に類似しているのは疑いない。一方で、波線部は次の古今集貫之歌に類似表現が見られる。

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

わがせこが衣はるさめふることのへのみどりそいろまさりける

(古今集巻第一・春歌上・二五・つらゆき)

すでに指摘されている宗于歌と右の貫之歌は『古今和歌集』では隣り合った配列となっている。6の歌は、惟明親王が二首の古今集歌から表現を撰取して作歌したものと考えられる。

二 同時代（近時代）歌を踏まえて詠作している例

次に同時代（近時代）歌人の歌を踏まえた上で詠作していると思われる歌を考察していく。一九首がここに該当すると見なしたが、さらに三つに分類した。

二―一 古歌の表現と同時代の表現を一首に取り入れている例

2 けふもなほゆきふるまつに おとづれてこゑうちそふるはるのは
つかぜ

(春・三十番・六〇)

(内侍のかみの右大将ふちはらの朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけけるうしろの屏風にかきたりけるうた)

秋

住の江の松を秋風吹くからにこゑうちそふるおきつ白浪

(古今集巻第七・賀歌・三六〇)

松に風や波が「こゑうちそふる」という構造は、古今集歌と一致する。「春の初風」が松に訪れるという構造は、

たけくまの松にやおとをたてそめて今朝は都の春の初風

(老若五十首歌合・春・五番・一〇・雅経)

に類似する。「春の初風」が結句に置かれている点も共通している。

20 まれにこし都の人はかれはててくさのとざしにあられふるなり

(冬・八八七番・一七七三)

女のもとにまかりたりけるに、かどをさしてあけざりければまかりかへりて、あしたにつかはしける

秋の夜の草のとざしのわびしきはあくれどあけぬ物にぞ有りける

(後撰集卷第十三・恋五・八九九・兼輔朝臣)

立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとざしにさはりしもせじ

(源氏物語若紫卷・六七・忍び所の女)

「草のとざし」という語句は、指摘されている後撰集歌や『源氏物語』の歌以来よく用いられる表現である。惟明歌の(山里に)「あられふる」という構造は『和泉式部統集』や『玄玉和歌集』の歌に見られる。

(冬のはじめ)

みやまべに雪や降るらん外山なるしばのいほりにあられふるなり

り

(和泉式部統集・五二二)

(山家の心を)

山里はとはぬ人をぞうらみつるくずのかれ葉に霞ふるなり

(玄玉和歌集卷第三・天地歌下・三四六・三位中将公衡)

特に玄玉和歌集歌の方は詞も類似している。

28 かくこふといかでか人にもらすべきおもひしのぶの山のした水⁹

(恋・一一五五番・二三〇九)

葦引の山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

(古今集卷第十一・恋歌一・四九一・読人しらず)

「山した水」も古今集歌以来忍恋でよく詠まれた表現だ。「山のした水」と「もらす」を組み合わせた例としては『久安百首』の歌などが挙げられる。

岩間行く山の下水せきわびてもらす心のほどをしらん

(久安百首・恋二十首・一一六三・上西門院兵衛／千載集卷第十一)

・恋歌一)

以上の三首は、古歌以来の語句と同時代の他の歌に見られる表現を一首の中に取り込んでいると考えられるものである。しかし、あくまで語句や表現レベルでの摂取に留まっている。

二二 同時代(近時代) 歌の表現を踏まえて詠まれた例

1 いつしかと雲井にはるやたちぬらんゆきけをこめてがすむ空か

な(春・一番・二)

(堀河院の御時百首歌めしけるに立春の心をよみ侍りける)

いつしかとあけゆくそらのかすめるはあまのとよりや春はた

つらん

(金葉集二度本卷第一・春部・三・藤原顕仲朝臣)

1 の歌は、指摘されている金葉集歌を直接踏まえたというよりは、

次に掲げる『正治百首』の二首から詞を取り入れたと考えられる。

いつしかと大うち山のかすめるは雲ぬに春やたちはじむらん

(正治初度百首・春・五〇四・通観)

晴れやらぬ心のそらのあさ霞雪けをこめてはるめきにけり

(正治後度百首・春・霞・六〇二・鴨長明)

ただし判詞で「右歌もなだらかに侍るを、雲井とそらとはおなじことにや侍らん」と指摘されているように、重複表現になってしまい稚拙な印象は拭えない。

8 水むすぶきしのやまぶきさきしよりそこさへにほふ**ゐでの玉河**

(春・二八三番・五六五)

水辺款冬といへるころをよめる

よし野川きしのやまぶきさきぬればそこにぞふかき色はみえける

(千載集卷二・春歌下・一一四・藤原範綱)

8 は千載集歌と非常に似通った詞続きになっているが、水底に映った山吹の花を詠む趣向は

よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる

吉野河岸の山吹ふくかぜにその影さへうつろひにけり

(古今集卷第二・春歌下・一二四・つらゆき)

のように、古今集の頃からすでに見られる。この趣向を、指摘されている千載集歌や他にも『御室五十首』の

影うつす**ゐでの玉河**そこすみて八重にやへそふ山吹のはな

(御室五十首・詠五十首和歌・二六一・釈阿)

などの近時代や同時代歌を参考にして詠んだ歌だと考えられる。なお、

「そこさへにほふ」という表現は多く藤波と共に詠まれており、山吹の花に用いた点に惟明親王の趣向が垣間見える。

14 七夕のあかぬわかれのなみだゆゑもみちのはしや色まさるらん

(秋・五七八番・一一五五)

七夕の後朝の心をよめる

たなばたのあかぬわかれのなみだにやはなかつらもつゆけかるらん

(金葉集二度本卷第三・秋部・一六五・皇后宮権大夫師時)

14 は上句を金葉集歌から、下句の紅葉の橋を染めるという発想は『六百番歌合』の寂蓮歌などから得たと考えられる。

七夕言志

たなばたはわたりもやらじあまの河紅葉の橋のふまばをしさに

(清輔集・秋・一〇三)

七夕の物おもふ袖やあまの川紅葉の橋を時雨そめけん

(正治初度百首・秋・一六四〇・寂蓮)

寂蓮の歌が時雨で染まると詠むのに対し、惟明歌は別れの涙で色まさと詠んでいる点に工夫が見られる。

19 うちわびてながむるそらのうき雲にこよひばかりの秋風ぞふく

(秋・八一七番・一六三三)

郁芳門院のねあはせに恋の心をよめる

恋ひわびてながむるそらのうき雲やわがしたもえのけぶりなるらん

(金葉集二度本・卷第八・恋部下・四三五・周防内侍)

19 も金葉集歌と上句がほぼ一致する。「ながむるそらのうき雲」と

いう表現は他にも

冬来ぬとながむる空の浮雲の行へはやがてしぐれなりけり

(御室五十首・冬七首・四八一・寂蓮)

などに見られる。また下句も『玄玉和歌集』に

九月尽の日ものにまかれりけるに、旅のとまりも哀に覚えて
侍りければ

草枕こよひばかりの秋風にことわりなりや露のこぼるる

(玄玉和歌集卷第五・時節歌下・四三三・民部卿成範卿)

という歌があり、複数の同時代歌から表現を取り入れて詠んだ歌だと言える。

次の歌は、指摘されている歌ではなく別の歌を踏まえて詠んだものだと考えられる。

5 よし野山みねのさくらのさきしよりはなによがれぬたびねをぞ
する

(春・一八四番・三六八)

花薫風といへることをよめる

よしのやまみねのさくらやさきぬらんふもとのさとににほふ
はるかぜ

(金葉集二度本卷第一・春部・二九・藤原忠通)

修行しありかせ給けるに、桜花のさきたりけるしたにやすま
せ給てよませ給ける

このもとをすみかとすればおのづからはなみる人となりぬべき
かな

(詞花集卷第九・雑上・二七六・花山院御製)

5 には『金葉和歌集』『詞花和歌集』の歌がそれぞれ指摘されてお
り、金葉集歌は上句がほぼ一致するが、歌意を考えればむしろ

さくらばなさかりになれば芳野山ふもとのさとに旅ねをぞする

(中宮亮重家朝臣家歌合・右・右京大夫殿下女房・八)

はなのしたのたびのとまり

ふるさとのいもやさくらをねたむらんはなゆゑわれによがれ
しめとて

(有房集・三二)

の二首が類歌のように思われる。特に中宮亮重家朝臣家歌合歌は、発
想や詞続きがかなり類似しており、また結句に「たびねをぞする」と
いう表現を置いているのが共通している。

7 さく花にこころをとめてかりがねのかへりわづらふあけぼのの
こころ

(春・二五五番・五〇九)

帰雁をよめる

はるがすみたつを見すててゆくかりは花なきさとにすみやな
らへる

(古今集卷第一・春歌上・三一・伊勢)

古今集歌が指摘されているが、歌意や表現からは次の

いまはとてたのむのかりもうちわびぬおぼる月夜のあけぼの
の空

(六百番歌合・三十番・一二〇・寂蓮)

を踏まえて詠んだものと考えられる。

以上の六首は、古歌を撰取したというよりは、近時代や同時代によ
く詠まれた表現を用いて詠んだと解釈するのが適当だろう。

12 きのふよりをぎのした葉にかよひきてけさあらはるる秋のはつ
かせ

(秋・五三六番・一〇七二)

延喜御時御屏風に

荻の葉のそよぐおとこそ秋風の人にしらるる始なりけれ

(拾遺集卷第三・秋・一三九・つらゆき)

12 で詠まれている荻の葉に秋の初風が吹くという歌は指摘されて
いる拾遺集歌以来和歌史の中で多く詠まれており、それは惟明親王の
時代も同様である。

かせは秋をつくるつかひ

ふきすぐるかせのおとだにかはらずはけふも夏ののをぎのう
はばを

(寂蓮結題百首・秋・三六)

夜のほどにかたへ涼しき風吹きて秋に成行く荻の音かな

(正治初度百首・秋・二〇三九・小侍従)

しかし、右に挙げた二首のように、その多くが風の音を詠んだもの
である。対して、惟明歌は直接的には風の音には言及しておらず、「か
よひきて」の表現などからもむしろ『正治後度百首』の

ねざめより秋のあはれはかよひけり荻のうは葉を風にまかせて

(正治後度百首・秋・くさのはな・八二四・宮内卿)

を踏まえて作歌したものと推測できる。

25 さざれ石のいはほとならんゆくすゑをちたび見るべき君とこそ
きけ

(祝・一〇五六番・二二一一)

わが君は千世にやちよにさざれいしのいはとなりてこけの
むすまで

(古今集卷第七・賀歌・三四三・よみ人しらず)

古今集歌以来の祝歌の常套のような表現であるが、

さざれ石のいはほとならんゆく末をはこやの山ぞかねてみせけ
る

(正治初度百首・祝・四〇〇・経家)

と、『正治初度百首』の祝歌に上句がまったく同じ歌があり⁽¹⁰⁾、歌
そのものは平凡な一作といえる。

27 くもりなきあまてる神のみづがきに君がちとせのかげうつるな
り

(祝・一一二番・二二三)

大式資通むつまじきさまになむいふとききてつかはしけ
る

まことにやそらになきなのふりぬらんあまてるかみのくもり
なきよに

(後拾遺集卷第十六・雑二・九三〇・相摸)

上句が後拾遺集歌の下句とほぼ一致する。類似表現として後鳥羽院
が詠んだ

心をば天てる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に

(老若五十首歌合・右・四〇二・女房(後鳥羽院))

がある。『正治百首』や『千五百番歌合』の主催である後鳥羽院の歌
を踏まえて言祝ぎの意を詠んだとも考えられるか。しかし惟明歌の下
句は二首にはない表現であり疑問は残る。

29 いまこんとちぎりしほどとしふりてのきはしのぶに庭はあさ
ぢに

(恋・一一八三番・二三六五)

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつる
かな

(古今集卷第十四・恋歌四・六九一・そせいほうし)

古今集歌とも似通っているが、上句は『堀河百首』の次の歌にほぼ
一致する。

今こんと契りしほどの夕暮はをぎのは風ぞ人だのめなる

(堀河百首・秋廿首・六八二・顕仲)

27 同様下句がやや気にかかる言い回しになっているが、他に類似表
現のものを見つけられなかった。なお判詞でも「右、心ははべるが、
末句ぞみにたちてきこえ侍れども」と述べられている。

30 たのまじとおもふものからくれごとにくころにかかるくものふ
るまひ

(恋・一一九七番・二三九三)

そとほりひめのひとりゐてみかどをこひたてまつりて

わがせこがくべきよひなりささがにのくものふるまひかねて
しるしも

(古今集墨滅歌(卷第十四)・一一一〇／日本書紀)

題しらず

たのめつつこぬ夜あまたに成りぬればまたじと思ふぞまつに
まされる

(拾遺集卷第十三・恋三・八四八・人麿)

「くものふるまひ」も恋人が来る予兆として多く詠まれた表現であ
る。『六百番歌合』に

けふはわれまたじとおもふこころさへまだかきたえずくものふ
るまひ

(六百番歌合・恋部上・廿二番・右・八二四・寂蓮)

と、「くじとおもふ」「こころ」など語句・歌意の類似が惟明歌に類
似した歌を見出せる。

33 いまこんのちぎりはたえてなかなかたのめぬ月ぞよがれがち
なる

(恋・一三三七番・二六七三)

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつる
かな

(古今集卷第十四・恋歌四・六九一・そせいほうし)

右の歌も、判詞で、「右歌は、いまこんといひしばかりの歌の心はあ
またになり侍りぬれば、とかく申すべきにも侍らず、ちぎるとたのむ
とはおなじ心と申しならはして侍り、さきには、たのむ、たのみとみ
つにかさなりて侍りつれば、ただきにくしとばかり申し侍りぬ」と
あり、1の歌同様重複表現を指摘されている。「今こむと」や「いま
こんの」という表現は同時代によく詠まれた表現で、惟明親王も29
で同じような歌を詠んでいる。「ありあけの月」から詠み替えられてい
る「たのめぬ月」も例えば、

くれにはかならずとたのめたりける人のはつかの月のいづる
まで見えざりければよめる

契りおきし人もこずゑのこのまよりたのめぬ月のかげぞもりく

る

(金葉集二度本卷第八・恋部下・四七〇・摂政家堀河)

あちきなくたのめぬ月の影もうしいひしばかりの有明の空

(正治初度百首・恋・七七九・経家)

のような例を同時代に見出すことができ、同時代に流行した表現を使って詠んだ歌だと言える。

以上のように、古歌以来よく詠まれてきた表現を用いて、惟明親王も詠作を行っているが、同時代や近時代の歌に類似の表現や同様の構造を持つものが多数見られた。惟明親王が和歌の学びにおいて、古歌だけでなくいわば当時の新しい歌も積極的に学んでいたことが窺える。しかし、その方法はまだ洗練されているとは言いがたく、先行歌の句をそのまま取り込んだり、判詞に重複表現を指摘されている歌が複数あったことから、この頃の惟明親王がまだ新人であり、歌人として未熟な段階であったことが察せられる。

二一三 同時代歌を踏まえて詠作している例

13 あきたちていくかもあらぬにあはれさをいつならひけんゆふぐ

れの空

(秋・五五〇番・一〇九九)

題しらず

秋立ちていく日もあらねどこのねぬるあさけの風はたもとすずしも

(拾遺集卷第三・秋・一四一・安貴王)

拾遺集歌とは上句がほぼ一致する。しかし惟明歌が立秋の歌として

秋の夕暮れに「あはれ」を詠んでいるのに対し、拾遺集歌は初秋の朝の涼しさを詠む。惟明歌の発想に近いものとしては『六百番歌合』の

あはれるみちのたぐひとおもひこし秋もいまはのゆふぐれの

そら

(六百番歌合・暮秋・三十番・右・四八〇・信定)

が挙げられる。六百番歌合歌は暮秋の歌であるが、むしろこの歌を踏まえれば惟明歌の「あはれさをいつならひけん」という表現もわかりやすい。

15 ちりぬればかげもとまらずなりにけり野ざはの水のはぎが花ず

り

(秋・六〇六番・一二二一)

くさむらのつゆをよみはべりける

けさきつるのばらのつゆにわれぬれぬうつりやしぬるはぎが

花ずり

(後拾遺集第四・秋上・三〇四・藤原範永朝臣)

「はぎが花ずり」という表現は同時代に多数用例が見つけられるが、惟明歌が踏まえていると思われるのは『正治後度百首』の

そこきよき野ざはに秋の色みえてわけぬ水さへ萩が花ずり

(正治後度百首・秋・八二七・宮内卿)

である。

16 ゆく人もとまらぬ野辺の花すきまねきがねてやつゆこぼるら

ん

(秋・六二〇番・一二三九)
寛平御時きさいの宮の歌合のうた

秋の野の草のたもとか 花すすきほにいでてまねく袖と見ゆらむ

(古今集卷第四・秋歌上・二四三・ありはらのむねやな)

花薄が秋風に靡く様を人を招く様子に見立てた歌は、指摘されている古今集歌以来、枚挙に暇がない。しかし惟明歌は、この見立てを詠んだ歌というよりは、『正治後度百首』の

行く秋をまねきかねてや 花すすきはてはしどろにをれふしぬら
ん

(正治後度百首・あき・くさのはな・九二八・越前)

と全体としてよく似た表現になっており、この歌を踏まえると上句の「ゆく人もとまらぬ」は、単に野辺の花薄に立ち止まらない人を指しているのではなく、「行く秋」を留めることができない、秋を惜しんだ歌だと解釈できる。

24 けふまではまだゆきふかき みよし野の山のあなたに 春やきぬら
ん

(冬・一〇四二番・二〇八三)

みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがに
せむ

(古今集卷第十八・雑歌下・九五〇・よみ人しらず)

「みよし野の山のあなたに」という表現こそあるが、古今集歌は厭世の歌であり、惟明歌とは異なる。上句の詞続きや歌意を踏まえると、次に挙げる『隆信集』や『別雷社歌合』の歌、

五条三位入道十首歌合によませられしに、立春の心を

きのふまでゆきふりつみし みよしののやまもかすみにきえにけるかな

(隆信集・春廿首・一)

昨日まで雪降りつみし みよしのの 春知りがほに今朝はかすめる

(別雷社歌合・霞・八番・左・一五・実守)

を踏まえて詠まれたものと思われる。これらの歌を踏まえば、「山のあなたに」来た春は霞だと解釈できる。

以上の四首は、いずれも同時代歌が惟明歌の解釈に影響を及ぼしており、語句や表現レベルの摂取に留まっていた前二つとは明らかに摂取の位相が異なっている。

おわりに

本稿では、惟明親王の『千五百番歌合』について、先行研究で指摘のある三五首を対象に親王がどのように先行歌を摂取しているのかを検討した。

古歌を摂取している場合と同時代・近時代歌を摂取している場合に大別し、後者はさらに三つに分類した。

古歌を直接摂取している場合、元の歌の詞続きや内容をほとんどそのまま取り入れている例が多数見られた一方で、元歌の表現や内容を詠み替えている例も散見された。そのレベルは詞や表現から主題に至るまで多岐に渡り、惟明親王が新古今時代の特徴の一つである本歌取りという手法に対して、試行錯誤を重ねていた、ある意味では積極的

だったとの見方ができるだろう。

次に、同時代や近時代の歌を踏まえて詠作したと思われるものの多くは、語句や表現のレベルに留まるものだった。実態に即していないとはいえ、定家の規定に従えば「近代」の歌は本歌としてはならないというが、惟明親王の意識として同時代の歌が単に詠作のお手本だったのか、それとも素材になり得る先行の作品だったのか、今回対象としなかった歌も含めてより検討していく必要があるだろう。

いずれにせよ、元歌の詞や表現を無造作に取り入れてしまっている例が多く見られることや、同時代・近時代歌人の歌の表現を取り入れているという点では、田仲氏が正治初度百首詠の特徴として指摘していた「先行歌の発想や詞続きを無造作に取り込んだと思われる歌」「同時代・近時代の歌人たちの表現を取り入れる」に重なるものである。二つの百首歌はほぼ同時期に詠作されたものであるため、その傾向が似通ってしまうのはある意味で当然だといえる。むしろ残り二つの傾向、「万葉語や難義の類（院政期歌学書で考察の対象とされている語彙・万葉語・比較的耳慣れない名所歌枕を詠じた歌）に対しての一定の関心」「漢籍や王朝物語世界『伊勢物語』『源氏物語』への志向」について、今回の考察では現われてこなかったため、この点に関してもまだ検討の余地があるといえる。

なお今回対象とした三五首の内、先行歌摂取の歌だと言えるかどうか判別したいものが二首あった。

26 いくたびか君が御代にはめぐりあはん月日の光ちぢの春秋

（祝・一〇七〇番・二二三九）

後一条院うまれさせたまひて七夜に人人まゐりあひて、さ

か月いだせとはべりければ

めぐらしきひかりさしそふさか月はもちながらこそちよめ
ぐらめ

（後拾遺集卷第七・賀・四三三・紫式部）

26 について、田仲氏は『後拾遺和歌集』の紫式部の歌を典拠作品として挙げている。賀歌として月を詠んでいる点は共通し、「ちぢの春秋」「ちよめぐらめ」と類似とみてよいような表現も見受けられるが、語句や表現をわかりやすい形で取り入れていた他の惟明親王の古歌摂取の歌とは異なり、また紫式部歌を踏まえずとも惟明歌を解釈することは可能であり、今回この歌は古歌摂取の歌とは見なさなかった。

34 なみのおと風のひびきもなれながらいくよになりぬまつがうら

しま（11）

（雑・一三九四番・二七八九）

西院の後、御ぐしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時、
かの院のなかじまの松 をけづりてかきつけ侍りける
おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみ
けり

（後撰集卷第十五・雑一・一〇九三・素性法師）

34 は後撰集歌が指摘されていた。両者は「まつがうらしま」を詠んでいる点が共通しているが、松ヶ浦島を詠んだ歌は他にも多数あり、その他の表現や歌意に一致するものはなく、26 同様今回は古典摂取の歌と見なさなかった。

注

- (1) 山崎桂子「憂しといひてもあまる涙を―惟明親王歌逸文考証―」『広島女子大国文』一〇号、一九九三年九月、「惟明親王歌逸文考証」(『和歌文学研究』六八号、一九九四年五月)、「三宮惟明親王伝―誕生から寿永二年まで―」(『国語国文』六四号、一九九五年五月)、『正治百首の研究』(勉誠出版、二〇〇〇年)
- (2) 田仲洋己「三宮惟明親王歌の正治初度百首詠について」(『中世前期の歌書と歌人』和泉書院、二〇〇八年)
- (3) 注(2) 掲出書収録。
- (4) 注(2)。田仲氏が指摘する惟明親王の正治初度百首詠の特徴は次の四点。
 - ① 先行歌の発想や詞続きを無造作に取り込んだと思われる歌
 - ② 万葉語や難義の類(院政期歌字書で考察の対象とされている語彙・万葉語・比較的耳慣れない名所歌枕を詠じた歌)に対しての一定の関心
- (5) ③ 漢籍や王朝物語世界(『伊勢物語』・『源氏物語』)への志向
 ④ 同時代・近時代の歌人たちの表現を取り入れる
 渡邊裕美子「俊成卿女にみられる同時代歌人の影響―『千五百番歌合』をめぐる―」『新古今時代の表現方法』笠間書院、二〇一〇年 初出:『和歌文学研究』(五九号、一九八九年一月)、『国文学研究』(九九号、一九八九年一〇月)
- (6) 和歌の引用は『新編国歌大観』に拠り、歌末尾に括弧して歌番号を付し、私に適宜傍線等を付した。また本文の校訂には有吉保『千

五百番歌合の校本とその研究』(風間書房、一九六八年)を用いた。
 (7) 同時代の類似した歌として慈円の次の歌がある。

難波がたかすみみのどけき明ぼのに春風よする沖つしらなみ

(拾玉集第四・短冊・(水郷春望)・四〇六二)

また後拾遺集歌を、惟明親王は好んで撰取していたのか『正治初度百首』でも似たような詞で歌を詠んでいる。

はるよりも心あるかな津のくにの難波わたりの冬のあけぼの

(正治初度百首・冬・一六一・惟明親王)

(8) 後代の「三十番歌合」にはこの歌を踏まえた歌があるが「みやこの霧」という詞続きにはなっていない。

越路より雲のいくへを分過ぎて都はくれぬ天つ雁がね

左の御歌、千五百番の歌合に、初雁は越路の雪をわけ過ぎてみやこの霧に今ぞ鳴くなる、と三宮のよみ給ひし面影あり(後略)

(三十番歌合・十二番・二三・女房伏見院)

(9) 「かくこふ」…「かくなん」から校訂

(10) 『和歌文学大系 正治二年院初度百首』四〇〇番歌の補注では、「類想歌」として惟明親王の当該歌が挙げられている。

(11) 「なれながら」…「さしながら」から校訂

(きたはら さゆり、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学)